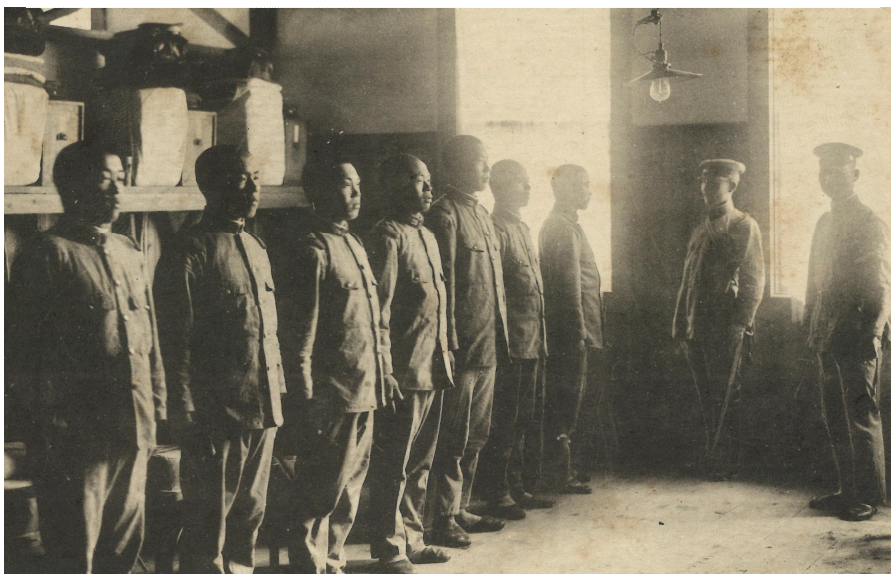
5. 軍隊生活



整頓された兵舎内の様子(戦前撮影)
兵舎内は整頓や清潔が厳しく求められました。本来は装備品がすぐ使用できることや感染症予防が目的のはずのこれらの規則が、新兵イジメの原因となりました。



兵士の点呼の様子(戦前撮影)
人数の確認が終われば、服装や装備品の手入れ状況、新兵個々の訓練や生活態度への指摘から始まり、最終的にビンタ等の体罰まで至る「点呼」は新兵にとって魔の時間でした。このため、点呼の時間帯に在室せずに済む警備任務は下級兵士達に喜ばれました。



外出の道すがら住民から蜜柑を頂く(AI 作画)
数金さんにとっては、住民と軍隊の距離が近かった時代の良き思い出です。よく出かけた戦友には、浪花(岩船)のタナカ キヨシさん(背低い)や御宿のシライ ハルオミさん(背高い)という方もいたそうです。

軍隊はとにかく仕事の多い組織で、元々漁師生活で忙しくしていた数金さんはまだしも、ゆったりと育った都会の兵隊は特に苦労しているようでした。また、部隊内では理不尽極まりない体罰も横行していました。起床後、勤務に出発した数金さん達の留守中、上級兵が訓練木銃でわら布団の寝台上に畳んだ毛布を散々に崩し、整理整頓不行き届きということで帰隊後に殴ります。上衣の襟に縫い付ける襟布の汚れや、食器洗いで飯粒１つ残っていても「並べ～っ！」と上級兵の怒声が飛びます。支給された毛布に記名し忘れ「タルんでいる！」とのことで散々殴られたことも。平手打ちはまだしも、スリッパや、時には「殴る側の手が痛くなる」という理由で、大きな金具のついた帯革(たいかく：上着ベルト)までも体罰に使われたそうです。就寝前の点呼は特に体罰の多い時間帯ですが、5 日毎の金輪島工場夜間警備の日だけは殴られずに済むうえに、合間には砂浜のハマグリを焼いて食べたり出来たそうです。そんな境遇の下級兵士達の唯一の憂さ晴らしが、上官への配食時に行う「頭垢(フケ)飯」でしたが、気づいてか気づかずか、上官はあまり食べなかったとか。体罰の他、衣類の盗難も多いので洗濯をしても悠長に干しておくことも出来ず、体温で乾かすつもりですぐに着込むしかなかったそうです。このような軍隊生活は、数金さん曰く「ただただ我慢」の日々でしたが、班員同士は助け合っていたので、自分たちの部隊から脱走や自殺者は出なかったそうです。

そんな厳しい軍隊生活でしたが楽しい思い出もありました。外出が許可され戦友と歩いていると、沿道の住民が「兵隊さん、お茶飲んでいきなさいよ～」と特産のミカンをご馳走してくれたり、広島市街で醤油味の「すいとん」(小麦団子 4.5 個と野菜入り)を食べたり、映画館に入ってしまえば上官とすれ違うたびの敬礼が無くなり都合がよかったことなどが忘れられないそうです。また、時折、部隊内で余興の会があり、子供の頃から自宅のポータブル蓄音機でよく聞いていた浪曲や流行歌を披露した数金さんは、「お前、唄が上手いな～」と周囲に褒められたのでした。